

古代エジプト中王国時代クヌムイト墓出土の

ガラス質メダリオン

—ビブロスとの交易関係と物質の解明を中心として—

山花京子

A Vitreous Medallion from the Tomb of Khnumit, Middle Kingdom -Its Byblite Connection and a Hypothesis of Manufacture-

YAMAHANA Kyoko

Abstract

In November 2019, the author had a chance to examine one of the jewelry (SR6009, CG53018) of Khnumit from Dahshur as a part of a joint program between Egyptian and Japanese research on ancient craft technology¹. In this article, the author would like to focus on a medallion² of Khnumit with a cow representation (SR6009-5).

The majority of Khnumit's jewelry indicates that they were perhaps brought into Egypt from outside. The cow's depiction of a medallion also indicates that it was likely a foreign manufacture.

Both textual and epigraphic evidence during the 12th to 13th dynasties show that there seems to have been active trade between Egypt and the eastern Mediterranean coastal areas through Byblos, a city strongly influenced by Middle Kingdom Egypt. A stylistic analysis on the rosette and eight-pointed stars tells that their motifs came from Mesopotamia and spread throughout the eastern Mediterranean as attributes of goddess Ishtar (Astarte) by the Middle Bronze Age. On the other hand, the circular geometric pattern enclosed in eight-pointed star gold ornament indicates the Cretan origin. The combination of rosette, eight-pointed stars, and circular geometric patterns scarcely occur in Mesopotamia or Crete, but in the Levant. The author thus speculates the Khnumit's ornament with a cow's representation depicts a goddess Hathor-Astarte, a major goddess of Byblos. The origin of the particular medallion might be Byblos.

There is yet another problem to clarify. Closer look of the cow's medallion

revealed that there were two layers, the upper layer being vitreous, and the lower layer being unidentified. A scientific analysis with a portable XRF was performed and revealed that the vitreous surface was made of almost pure silica. Thus the surface layer was most probably made of pure quartz. On the other hand, the material of the bottom layer with a representation of a cow was unidentified. A microscopic study was conducted, and the medallion was compared with other Middle Kingdom faience, a modern replicated faience and a New Kingdom glass. The overall appearance of Khnumit's cow medallion resembled that of faience. The author, therefore, concludes that the most potential underlying material of the medallion is faience.

In sum, the study on Khnumit's jewelry (SR6009-5) reveals that Byblos was a possible manufacturing place, and the cow's medallion was made of a quartz layer on top of the colored faience layer.

1. 序 章

1-1 研究の概要 (図1、図2)

2019年11月にエジプトのカイロ博物館にて遺物調査の機会を得た³。この調査は古代エジプトの金属工芸技術を研究するために複数の黄金製品を対象として行われたが、本稿ではそのうち、SR6009-5の登録番号⁴を持つ遺物に焦点を当てた。

この装飾品は中王国時代第12王朝の王アメンエムハト2世(紀元前1877~1842年頃)⁵のピラミッド複合体に埋葬された「王の娘」の称号を持つクヌムイト⁶の墓から出土している。クヌムイトの墓は1895年2月にデ・モルガン(de Morgan)⁷によってダハシュールのアメンヘムハト2世のピラミッド西側と周壁との間の地下6mの地点で未盗掘の状態で発見された。アメンエムハト2世のピラミッド複合体には4人の「王の娘」の称号を持つクヌムイト、イタ、イタ・ウェレット、サット・ハトホル・メリトが埋葬されており、前者3人の墓からは中王国時代を代表する黄金製の装飾品が出土している。デ・モルガンはクヌムイト墓より出土した黄金製品を61項目挙げている⁸が、これらのうちウセク広襟飾りやプレスレットにはエジプト古来の意匠が使われているものがある一方、非エジプト的な意匠あるいは工芸技法が見られる金細工製品も多い(CG52865、52975-9)。その中でも象嵌七宝によると思われる襟飾り(JE31113)や、粒金細工のネックレスなどは当時の西アジアにあった工芸技術⁹を駆使して作られたものであり、古代エジプトにおいては初現にあたる。

図1のSR6009には黄金製鳥形ビーズ、蝶形、花卉文と星形文の粒金細工、ガラス質のメダリオン、五芒星粒金細工、貝形、ハエを象ったと思われる逆ハート形装飾品がある。これらの中にはネックレスのように鎖で繋がれているものもあるが、鎖もなく本来の用途が不明なものもある。特筆すべきは、鎖を含めて、図1の装飾品の意匠はそれまでのエジプトには存在していなかったのである。つまり、SR6009の黄金製装飾品はほぼ全てがエジプトの外部からもた

らされた、あるいは非エジプト人の職人によって作られたと考えてよい。王族の墓からこのような非エジプト的意匠をもった装飾品が出土した事実は、当時のエジプトと外部地域との間の交流が少なからず行われていたことが推測できる。中王国時代は後の新王国時代ほど歴史的な記録が充実していないため、長い間、研究が進んでいなかったが、近年の新史料の発見や考古学資料の再考察によって、第1中間期から中王国時代にかけての国内の政治的情勢や対外関係などが徐々に明らかになっている (Moreno García, 2017; Cline and Harris-Cline, 1998; Willems, 2014)。彼らの研究によると、中王国時代の統一王朝が始まる以前より、紅海沿岸のメルサまたはワディ・ガワシス (Mersa/Wadi Gawasis) やデルタのテル・エル・ダバア (Tell el-Dab'a) などを拠点として、南方のヌビア地域、そして北方のレバントとの交易が行われていた (Moreno García, 2017: 92)。南方との主要な交易品は金、象牙、黒檀、香料などで、北方からは羊毛の織物 (ibid., :119-120)、銅、トルコ石、ラピスラズリ、没薬、杉 (材木) などがもたらされていた。しかし、南方からエジプトに搬入されるのは、加工前の原材料である。本稿で考察を行うメダリオンと伴出する黄金製装飾品は、当時のエジプトにはない加工技術を持って細工されたものであるため、原材料供給地であった南方よりも、北方のレバント¹⁰を含む東地中海沿岸地域を加工地の候補として考えるのが妥当であろうと考える。

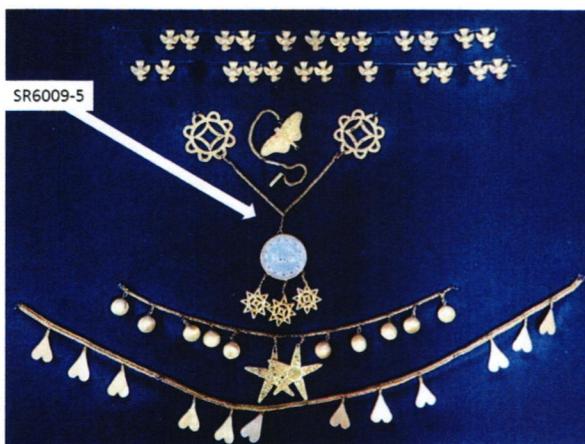


図1 クヌムイトの黄金製副葬品 カイロ エジプト博物館収蔵番号 SR6009 (筆者撮影) photograph by courtesy of the Egyptian Museum, Cairo



図2 中央メダリオン部分クローズアップ (筆者撮影)

1-2 調査方法

まず第1章では考古資料や図像資料をもとに、当時のエジプトと周辺地域について検証する。ここでは第12王朝アメンエムハト2世の「メンフィス碑」、トードのメンチュ神殿への奉納物、センウセルト2世治下の上エジプト第16ノモス (オリックス州) とナイル川東部の砂漠地域を治めた知事であったクヌムヘテプ2世の墓壁画などから、第12~第13王朝のエジプトと東地中海沿岸地域との交流を探る。次に、第2章ではクヌムイトのメダリオン (SR6009-5) (図2) を詳細に調査し、この図像の意味およびそこから類推できるエジプトと外部地域との関連を

検討する。そして、考察を牛の図像だけではなく、SR6009-5 を構成するすべての花形文と星形文の装飾品についても視野を広げ、その文様の特徴をエジプト以外の東地中海沿岸地域と比較しながら述べ、果たしてこのメダリオンの起源がどこにあるのかを推察する。次に第3章では、理化学的な分析結果を参考にしながら、メダリオンの材質と製法について試論を述べたい。

2. 中王国時代の外部地域との交流

2-1 エジプトとビブロス

古王国時代が終わり、諸侯林立の第1中間期にはエジプトと外部地域とのコンタクトは非常に限定的であった。しかし、その中でもヘラクレオポリスに拠点を置く勢力はアイン・スフナ (Ayn Sukhna) などの港湾を利用し、対外交易を積極的に行っていたと考えられている。その後、メンチュヘテブにより国土が統一されて中王国時代になると、レバントとの交易関係は一層活性化される。

当時の対外関係については、あまり多くの記録は存在しない。しかしながら、エジプトとビブロス¹¹との関連は、第1中間期には成立しており、当時のエジプトは香料である没薬をビブロスから輸入していた (Edel, 2008: 1743-4, 1814, fig. 24)。中王国時代には、ビブロスエジプトの従属国として東地中海沿岸及びメソポタミア地域との交易を行う際のトレーディングポストと見做されていた。古バビロニア期のマリから出土した楔形文書によると、エジプトの文物は *gulayu* (「ビブロスからの文物」の意) と記されていたことから、エジプトはビブロスを仲介として外部地域と交易を行っていたことが推測できる (Durand, 1999; Ahrens, 2011:35)。ビブロスの支配者はエジプト語で「ビブロスの王子」の称号を持ち、「王家の墓」I~III 墓には同時代のアメンエムハト3世や4世の銘のある遺物も遺されていた。彼らの墓のレイアウトは第12~13王朝時代のエジプトの岩窟墓と類似し、出土した副葬品はビブロス的な特徴を残しながらもエジプトの支配階級の副葬品と強い相関を示している (Montet, 1928; Kopetzky, 2012:393-4)。このようなエジプトとビブロスの密接な関係は少なくとも第12王朝から13王朝の間は続いたようである (Ryholt, 1997: 86-90)。

上記よりエジプトはビブロスという港湾都市を交易の中心地としていたことがわかるが、それではもう少し年代を狭めて第12王朝の特にアメンエムハト2世の治世下ではどのような国際関係を築いていたのだろうか。古代エジプト第12王朝時代は、現在の編年ではレバントでは中期青銅器時代 I-IIA (Middle Bronze Age I-IIA) にあたり、北メソポタミアでは古アッシリア (紀元前 1920-1740 年頃)、ギリシア本土では中期ヘラディック (Middle Helladic, 紀元前 2090-1625 年頃)、クレタ島及びキクラダス諸島では中期ミノア期 IA (Middle Minoan IA, 紀元前 1950-1750 年頃) にあたる¹²。

2-2 アメンエムハト2世治世下のエジプトと外部地域との交流

アメンエムハト2世の治世において西アジアとの関連を記したテキストに「メンフィス碑¹³」がある。碑文はアメンエムハト2世の年代記と考えられ、同王の治世に行われた葬祭儀礼、宗

教儀式、戦役、そして諸外国からの搬入品¹⁴リストなどが時系列的にまとめられている。碑文によると、「イウアイ」と「イアシィ」の土地（現在の地名不明）を破壊し、アジア人「アムウ¹⁵」、武器、ラピスラズリ、銅、金など多くの戦利品を持ち帰っている。碑文にはそのほかにもいくつかの地名が記されており、エジプト語で表記されたこれらの地名の同定には多くの研究者が試論を述べているが、東地中海沿岸地域（クレタ島、アナトリア半島南、レバント地方を含む地域）を指し示しているという点で一致している(Altenmüller and Mousa, 1991: Malek and Quirke, 1992: de Fidanza, 1998: Marcs, 2007)。そして、この時代にエジプトへは東地中海沿岸地域からの搬入品がもたらされているだけではなく、エジプト美術の影響を受けた工芸品もレバントやクレタ島などで発見されており、双方向のコンタクトがあったことが伺える。

アメンエムハト 2 世は上記の東地中海沿岸地域より持ち帰ったものをエジプトの神殿に捧げており、アルマントやトードのメンチュ神殿には「アジアの銅」で作られた器を奉納したことが記録されている (Grajetzky, 2006: 46; Lilyquist, 2015: 36f)。また、トードのメンチュ神殿にはアメンエムハト 2 世の銘がある箱が奉納されており、内容物には銀器や未加工のラピスラズリ、印章、浮彫の施されたラピスラズリなどがあつた。メンチュ神殿の奉納物のうち、印章に施された図柄はファイストス（クレタ島、Middle Minoan IB-II）より発見されたものと酷似し (Bisson de la Roque, 1953: pl. 21; Lilyquist, 2015: 35f)、銀器の一部はミケーネあるいはアナトリアに起源を持つ形であろうと推測している (Lilyquist, 2015: 35f, citing Davis 1977)。つまり、トードのメンチュ神殿の奉納物構成は西アジア（ラピスラズリ）、アナトリア（銀器）及びクレタ（印章の一部）にて製作された可能性を示唆している。この事実は上記のアメンエムハト 2 世の戦記により推測された当時エジプトとコンタクトがあつた地域と合致することになる。

2-3 センウセルト 2 世治世下のエジプトと外部地域との交流（表 1）

アメンエムハト 2 世の後継者であるセンウセルト 2 世の治世下で上エジプト第 16 ノモスとナイル川東部の砂漠砂漠地域を治めた知事のクヌムヘテプ 2 世は、ベニ・ハサンに岩窟墓を造営しているが、その墓の北側壁面に明らかに非エジプト的な着衣と面立ちで表現されたアジア人「アムウ」が描かれている。アムウはクヌムヘテプ 2 世の面前に立ち、族長と思しき人物イブ・サア（セム語のアビシャレもしくはアビシャイ¹⁶）の後ろにはレイヨウを連れた男性や武器を持つ男性、鮮やかな衣装をまとう女性、ロバの背に載せた子供などが描かれている。族長の前にはエジプト人書記がおり、彼が持つパピルス紙にはシュウのアジア人 37 人がメスデムット（メスデメト）（おそらくは方鉛鉱）を持参したことが記されている。

この壁画はセンウセルト 2 世の治世 6 年目に到来したアジア人たちを描いており、東部砂漠、つまり紅海に抜ける重要な交易路を掌握しているクヌムヘテプ 2 世に対して敵意を抱いているわけではなく、交易相手としてエジプトにやってくるとの見解もある。カムリンによると、彼らの一団の男性たちは当時はまだエジプト人が使用していない武器（斧や槍）を持ち、それらのうちダックビルアックス（アヒル嘴状斧）はレバントの中期青銅器時代（MBIIA）期の特徴を示している(Kamrin, 2013: pp. 158-161)。さらに、シュウという地名については、他のエ

ジプト語及びセム語資料よりレバント南部（ヨルダン川東部から死海周辺）の民族であろうと考えられている（Kamrin, 2013: 162）。彼らがエジプトにやってきた目的については、これまで交易者説（Klebs, 1922: fig.6, 162ff, figs.120-21; Wilson, 1950: 229）あるいは外国の使節団（Hayes, 1971: 503-4）説が様々な研究者により唱えられてきたが、カムリンは彼らは冶金技術者の集団ではないかとの推察をしている。中王国時代初頭では、エジプトの冶金技術は西アジアと比較して劣っていたことは確かで、西アジアの冶金技術は先進技術を取り入れて軍事大国を目指すエジプトには喉から手が出るほど欲しいものであった。壁画に示されているロバの背には「革製のふいご」が描かれており¹⁷（Kamrin, 2013: 160; Shea 1981: 222-23, Nibbi, 1987: 33）、彼らが持参した「方鉛鉱」は冶金にとって重要な鉱物であるため（Kamrin, 2013: 163）、これらのアジア人一団は冶金技術者としてエジプトへやってきた人々なのではないかと推察しているのである。つまり、当時のエジプトにやってくる外国人は戦争捕虜としてエジプトへ連行される人々だけではなく、西アジアより最先端の技術を持ち、エジプトへ国益をもたらすために入国する人たちの存在もあったことが推察される。

また、アメンエムハト 2 世より 2 代後のセンウセルト 3 世に仕えたクヌムヘテブ 3 世のダハシュールのマスタバ墓より発見された文書には、ビプロスとウラッザの間の紛争をエジプトが仲介して鎮めたことが記録されている（Allen, 2008; Wimmer, 2005: 131; Rainey, 2006: 281-2, 285）。

表 1 第 12 王朝～13 王朝時代のエジプトと東地中海沿岸地域との関連がわかる遺物

王の名	実年代	発見された遺物	発見場所
アメンエムハト2世	c. 2181-1991BC	イタ（アタ）の銘のあるスフィンクス	カトナ
		トードのメンチュ神殿より発見された銀器やラビスラズリ、印章など	トード
		アメンエムハト2世の年代記	メンフィス
センウセルト1世	c. 1961-1917 BC	ハビジェファの彫像	テル・ヒジン（レバント）
アメンエムハト2世～センウセルト2世	c. 1919 - 1878 BC	王妃の頭部を持つスフィンクス片	ローマ近郊、おそらくティボリのハドリアヌスのヴィラ
アメンエムハト2世～センウセルト3世	c. 1919 - 1859	ジェフティヘテブの彫像	メギド
?	MB, 18 th cen. BC	スバルトゥ（北部シリア）やアラシア（キプロス）などとの金製品、布、油などの交易が記されたアッカド語の楔形文書	テル・シアヌ
アメンエムハト3世	c. 1859-1813 BC	王銘付黒曜石製壺	ビプロス「王家の墓 III」
		黄金製胸飾り（「ビプロスの王子」「イブシエムアビ」（アビシエムの息子）の表記がある）	ビプロス「王家の墓 I」
		スフィンクス	ネイラブ、ウガリト、ハツォール
アメンエムハト4世	c. 1813-1805 BC	箱	ビプロス「王家の墓 II」
		スフィンクス	ペイルート
ネフェルヘテブ1世（第13王朝）	c. 1720-1711	ビプロス王の浮彫	

後の新王国時代による東地中海沿岸地域とのかかわりほど記録がないため、中王国時代にエジプトが同地域とどれほどの関わりを持っていたのか不明な点が多いが、第 12～13 王朝当時のエジプトの遺物とエジプト美術に影響を受けたものが東地中海沿岸地域に数多く拡散している。表 1 は中王国時代第 12～13 王朝の頃に東地中海沿岸地域でエジプトの遺物が発見された

例、そしてエジプトの文献資料において言及されている地域を記した。表1では、レバントにおいて大型のスフィンクス像が合計4体もエジプト外で発見されていることがわかる。大型遺物の出土は、その土地とエジプトが国家規模で何らかのつながりを持っていたことを示唆している。

また、表1からはエジプトと前述のピブロスとの明確な繋がりが示されているほか、メソポタミアとの交易路上にある都市カトナや、アナトリア半島やキプロスとの関連も見取れる。

3. クヌムイトのメダリオン

3-1 クヌムイトの黄金製装飾品（表2）

黄金製品が古代エジプトの代名詞とみなされるのは、新王国時代第18王朝以降であり、それ以前の時代において黄金の使用は限定的であった。古王国時代には神殿や王、王族の葬祭用品にも数えるほどしか使用されていない。ところが、中王国時代第12王朝の特にアメンエムハト1世時代以降、女性の副葬品（生前の使用については定かではない）に黄金製品が目立つようになる。中王国時代の都がおかれたイチタウイ近郊のリシュトから発見されたアメンエムハト1世時代のセネブティシの墓より発見された装飾品を皮切りに、ダハシュールのアメンエムハト2世のピラミッド複合体より上記の4人の王女たちの夥しい数の黄金製装飾品が発見され、王の廷臣たちの墓からも少なからず発見されるようになる。これらの黄金装飾品には、パピルスとロータスなどを組み合わせた冠、ブレスレットやアンクレットなど、古王国時代より使われている伝統的な形態の装飾品以外に、スカラベ指輪や花冠、胸飾り（ペクトラル）、ペンダントなどの新たな形態が加わる。そして、それらの新たな形態の装飾品にはそれまでエジプトに存在していなかった粒金細工、象嵌細工などを施した所謂「舶来」の工芸技術の粋を極めたものが多くあらわれている。

クヌムイトの時代から約50年後のセンウセルト3世の王妃であったメレト（メレト）の墓から出土した副葬品（表2）には二枚貝を模した装飾品が7枚ある。そのうち、象嵌細工の施されている1枚¹⁸は上述のピブロス王墓（Royal Tomb II）より出土している貝形のペンダント¹⁹と酷似している。ピブロスのペンダントはメレトのものと同様、大型二枚貝を模しており、いずれも地金を金線で仕切って象嵌（クロワゾンネ）を施している。メレトの二枚貝の装飾は殻頂部分にエジプトの伝統的なロータス文様、そして外周にはデフォルメされた花卉文が赤褐色、（青）緑、濃紺の3色の貴石で象嵌されている。一方、ピブロス王墓（Royal Tomb II）より出土した黄金製二枚貝の象嵌細工は色使いがメレトのものと全く同じある。貝の外周には連続七宝文（後述参照）の象嵌が施され、内側には王権の象徴であるハヤブサ、日輪、ウラエウス、そしてカルトゥーシュ内にはイブシエムアビというピブロスの支配者の名が同じく赤褐色、（青）緑、濃紺の3色の象嵌細工で表現されている。このような黄金製二枚貝の象嵌細工はエジプト（ダハシュール）とピブロスにしか例がない。当時のエジプト王宮とピブロスとの緊密な関係が示されているが、特にピブロス出土のものについては、エジプトからピブロスへの贈物とは考えにくい。なぜならば、ピブロスの当該装飾品にはエジプト風のモチーフが

使われているが、例えば本来ならば図像の最も上に配置されるべき日輪が、ピブロスの例ではウラエウスの胴体の脇に置かれ、王名枠に対してイプシエムアビの名が逆に記されているからである(Kopetzky, 2012: 398ff)。

さらに、ピブロスの例においては連続七宝文、エジプトの例においてはデフォルメされた花弁文があるが、これらはエジプトの伝統的な文様ではない。中王国時代第 12 王朝以降になって初めてエジプトにもたらされた文様である。

これらを考え合わせると、黄金製二枚貝のペンダントはピブロス経由でエジプトへともたらされたと考える方が自然であろう。

表 2 中王国時代に黄金製品が副葬された墓と黄金製品リスト

第12王朝	アメンエムハト1世	アメンエムハト2世			センウセルト2世	センウセルト3世		アメンエムハト3世	
治世 (共同統治時期を含む) (Circa, BC)	2181-1991	1929-1895			1897-1978	1878-1843		1842-1797	
墓被葬者の名 発見場所	セネブティシ リシュト	イタ ダハシュール	クヌムイト ダハシュール	イタ・ウェレ ト ダハシュール	サアト・ハト ホル・イウネ ト ラフン	サアト・ハト ホル ダハシュール	メレット ダハシュール	ラーイブ ラー・ホル ハラ	ネブヘテフ ティ・ケレド ハラ
発掘者&発掘年	Mace, 1906-7	de Morgan, 1894-5			Petrie, 1914	de Morgan, 1894-5		de Morgan, 1895	
黄金が使用された副葬品	襟飾り 腕輪 アンクレット 冠 護符	短剣 腕輪 ジェド形留め 具 ビーズネット 襟飾り 燕形護符	襟飾り 腕輪 アンクレット ビーズ 冠 輪飾り ペンダント	腕輪 腰飾り 襟飾り 短剣	冠 髪裝飾具 腕飾り タカラガイ形 腰飾り スカラベ指輪 鉤爪形ペンダ ント 腕輪 留め具 ライオン形護 符	腕飾り スカラベ プレスレット の留め具 ペンダント ライオン形護 符 タカラガイ形 ビーズ 腰飾り 円筒形護符ペ ンダント アンクレット 用鉤爪形飾り	腕飾り スカラベ 指輪 円筒形護符ペ ンダント 牡蠣形護符 ヒョウ形ビー ズ ライオン形護 符 アンクレット 用鉤爪形飾り	冠の「結び 目」部分 腕輪 (金被) ビーズ ハヤブサ頭形 襟飾り部分 短剣	冠 腕輪 鍍平 ハヤブサ頭形 襟飾り部分 短剣

Wilkinson, A., 1975, pp. 50-55を基に改変

3-2 クヌムイトのガラス質メダリオン

対象のメダリオンは直径約 18.00 mm で、枠部の厚みは 1.80 mm、中央部分の厚みは 2.40 mm である。1 円玉の大きさにほぼ等しい。表面は透明なガラス質被膜で覆われている。一見するとガラス製のように見えるが、クヌムイトが生きた時代において、古代オリエント全域を見渡してもガラスの生産に着手していたのはメソポタミア地域しか知られておらず、エジプト人にとっては未知の物質であった。メソポタミア地域においても、紀元前 23 世紀頃にガラスが初めて現れて以来、ガラスづくりの技術は次第に洗練されてはいたが、ガラスの原材料に含まれる微量の鉄のためにどうしても緑～黄緑色の色がついてしまい、無色透明のガラスは未だ作りだせていない。したがって、このメダリオンのような透明で平面的なガラスを作る技術はまだ持ち合わせていない。もしこのメダリオンがガラスで作られているとしたら、世界で最も早いガラス工芸作品となる。

発掘者デ・モルガンは、本対象遺物のメダリオンを「粒金細工の枠の中に座した牛? がモザイクで表現されており、その上に保護の層がある。モザイクは現存する中で最も古く、非常に

精緻な作りであるが、拡大鏡で見るとつなぎ目に隙間が見える。メダリオンの背景は1枚の石でできており、モザイクというよりは石の象嵌細工のようである(de Morgan, 1903: 67。)とし、メダリオンは石製であるとしている。しかし、石製の象嵌細工であれば、文様の縁辺部に見られるような滲みがあるはずがなく、色と色とが混ざり合うことはない。むしろ、砂絵のように色の粒が混じりあった部分が見て取れる。ただ、砂絵であれば糊で砂粒を固定していたとしても、4000年の間に経年劣化によって糊は剥がれ、大小の砂粒が動く結果となる。本資料はそのような原位置から外れた砂粒の動きもないのである。

クヌムイトのメダリオンの周りの黄金枠や粒金細工については別稿で扱うこととし、まずメダリオンに表現された意匠についての検討を行う。

メダリオンは粒金の施された枠内全体に淡い青色（青と白の斑）の地色があり、周囲をボーダー（縁飾）が取り囲んでいる。中央には牛のように見える四足動物が蹲っており、その胴体は白地に黒の斑がある。大きく外反する角、大きな耳、不自然に細い胴体、長く反りあがる尾が特徴的である。文様は全体が滲んでいるように見え、同時代の象嵌細工のシャープな色のコントラスト表現とは趣を異にしている。

メダリオンの縁辺部分には赤・白・黒・黄緑の4色で帯状の文様が施されている。古代エジプトでは、古王国時代から中王国時代の墓に描かれる縁飾帯は赤・白・緑（青緑）の3色で彩色されることが多く、黒はあまり用いられていない。クヌムイトの墓より出土した他のプレスレットや襟飾りなどの黄金製品の彩色には共通して赤・緑・濃青の3色が使われており、これらの装飾品が少数の職人たちによって同時期に制作された可能性を示唆している。

中央の牛は古代エジプトで主要な神であった牝牛姿のハトホル女神を表現しているのだろうか。描写された牛に神性が付与されている牛であると推測すると、ハトホル女神か牝牛の形をとる他の女神の可能性もある。同定の手掛かりとなるのが頸飾りであるが、小さい上に不明瞭であるため、正確な同定は不可能である。しかし、下部が広がる形状はバート(Bst)女神の象徴物に似ている。クヌムイトの墓から出土した装飾品にはバート女神を象嵌で表わした類例があり²⁰ (de Morgan, 1903, Pl. V: 43; Egyptian Museum, Cairo, Catalogue Nos. 52920-21)、その形状は本メダリオンの牛の頸についた飾りと酷似している。バート女神は第1王朝時代から牝牛（水牛）の頭を持つ女神と表現されていた (Rashed, 2009: 338)。形態的な特徴としては、牝牛の頭部より上部分しか表現されないことと、角が大きく内湾していることである。バート女神は天空、守護、豊穰（豊饒）などを司る女神として現れたが、次第に同じ牝牛の頭を持つハトホル女神と習合するようになる。新王国時代が始まるころにはバート女神の表現は見られなくなり、代わりに同じ牝牛で外反する角の間に日輪を戴くハトホル女神に吸収されていったと考えられている (ibid., 2009: 337)。この他にも第12王朝時代の王妃や王女の墓より出土した黄金製品には同形状のバート女神を表現したもの²¹が見られる。また、バート女神のメダリオン（ヘカー・バート）は古王国時代第4王朝時代のクフ・カーフ王子の墓に描かれたように、王の寵愛を受けた王子や高官のみが身につけることができたシンボルであった (Helck, 1954: 34f)。本メダリオンの意匠のように、牛がバート女神の象徴を頸に付けている例は初期王朝時代のナーガ・エル・デールより出土した金製のメダリオンが挙げられる²²。つまり、クヌムイト

のメダリオンがパート女神の象徴物を頸飾りとしている牛（牝牛）と考えるならば、このような意匠は初期王朝時代から存在することになり、クヌムイトより 500 年以上前より存在している伝統的な意匠であることが言える。

しかし、本メダリオンの意匠にはエジプトの厳格な美術様式には則っていない箇所がいくつかある。それは、全体のプロポーションが崩れていること、牛の尾が上に反りあがっていること、そして牛が蹲っていることである。エジプト式美術規範では、表現される対象は厳密な格子枠の比率によって表現方法が決められているため、ステレオタイプに描かれる。本遺物のように小さなものであっても、この慣習は厳密に守られるはずである。そして、古代エジプトの牛の表現では、尾が反りあがっている例はない。神聖な牛は四肢が見えるよう立っている姿勢をとることが多い。つまり、本メダリオンの意匠は一見エジプト風ではありながらも、エジプト人ではない工人によって作られたと考えることができる。一方、メソポタミアでは紀元前 2800 年頃のウルク（ワルカ）より蹲った牛の小像が 2 体（Das Vorderasiatische Museum, Berlin, VA11025, VA 10108）（Sttatische Museum zu Berlin, 1992）と紀元前 2500 年頃の石製小像（VA 7442）も出土しており、古くから蹲った牛の図像は比較的多くみられることがわかる。

3-2 クヌムイトの黄金製品の製作地推定（図 3）

それでは、この工芸品はどこで作られたのだろうか。図 1 を見ると、このメダリオンは鎖で繋がれた 2 片の花弁文の粒金装飾品とメダリオンの下には同じく鎖で繋がれた 3 片の 8 芒星形文粒金装飾品²³がついている。このように一連の状態で見られているところから、この装飾品は 1 セットとして特定の場所で作られたと考えてよいだろう。以下では、これらの装飾品の類例を探り、意匠の意味と製作地を探ってみたい。

まず、図 1 の牛の図柄のある装飾品を中心のメダリオンとするならば、そこから一方に二股に分かれた鎖があり、その端には粒金細工の花弁文装飾品がついている。さらに、牛の図柄のあるメダリオンからもう一方の鎖が出ており、それは 3 つの粒金細工の星形文装飾品へと繋がっている。鎖の端に付けられた花弁文形は最大径 2.50 cm、そして星形文の最大径 1.30 cm である。花弁文の装飾品は外側が 8 弁の花弁で表現されている。花弁形の装飾品はメソポタミアに多く、紀元前 3 千年紀後期から 2 千年紀初期のブラク、ウル、ウルクなどから出土しており、アナトリア半島、レバント、東地中海島嶼部、パレスチナ南部、エジプトにまで影響が到達している（Maxwell-Hyslop, 1971: p. 47）。特に初期王朝時代のウルに現れた剣菱形 8 花弁の文様は後のサルゴン王時代（紀元前 2334～2279 年頃）には標準形となる（*ibid.*: 26）。エジプトにおいて花弁文の使用は紀元前 2 千年紀中庸から始まる新王国時代以降に急激に増えるが、それ以前の時代にも存在はしている。初期王朝時代のアビュドス出土からは 21 花弁の花弁文ブレスレットが発見され、古王国時代第 3 王朝のスネフェル王複合体（ダハシュール）より 12 花弁文のある浮彫断片が出土していることから、花弁文はエジプト人にとって旧知の文様であった。したがって、花弁文をキーワードとしてクヌムイトのメダリオンの製作地を探るのは不可能である。

一方、星形文は初期のエジプトの美術表現には見られないものである。クヌムイトの時代以前に表現された星形文と言え、古王国時代末期に王墓の天井に刻まれるようになった星であるが、これは5本の直線でヒトデのように表現されていた。中王国時代以降においても、古代エジプト人は天体の星を表現する際以外に星形文を使用することは稀である。しかし、視点をメソポタミアに移してみると、4芒星、6芒星、8芒星の形をした類例は非常に多く存在する。星形文の起源はアッカド王朝サルゴン王時代にあり、以降西アジア全域に広まったとされる。サルゴンの孫ナラム・シン（紀元前2254～2218年頃）の碑には、イシュタル女神²⁴の象徴である8芒星と月の神であるシン神の三日月、そして太陽神のシャマシュが表現され、古バビロニアと古アッシリア時代（紀元前2000～1600年頃）にはメソポタミアの伝統的な神の象徴となった（*ibid.*,:142）。しかもそれらの星形文の中心には必ず円形の凹凸があり、尖った花卉を持つ花文とみなすこともできるため、マックスウェル・ハイスロップは8芒星と同様に4芒星や6芒星は花卉文と同一視されイシュタル女神を表象する文様となったと説明している（*ibid.*,:142）。一方、小林によると、花卉文はイナンナ女神の持つナツメヤシの花を図案化したものであるとし、金星を司る同女神の象徴として8芒星が使われるのだという（小林、2019:108）。

メソポタミアだけではなく、エジプトから距離的に近い南パレスチナのテル・エル・アジュールからは黄金の8芒星メダリオンと粒金細工の8芒星装飾品が発見されており、レバントのウガリトからは同じく黄金の8芒星、6芒星、4芒星装飾品が発見されている。これらはすべてその土地の太陽神と関連深い女神（テル・エル・アジュールではイシュタル女神²⁵）との関連性が指摘されている。

以上から、古代エジプトの中王国時代とほぼ同時代にあたるメソポタミアのウル第3王朝と続く古バビロニア、古アッシリア時代においては、この花文/星形文は西アジア及びレバントでは広く信仰を集めたイシュタル女神の象徴として汎オリエント世界に一般的な文様となっていたことがわかる。マリから出土した文書によると、鉄器時代初期の北レバントのウガリトにはミケーネ人、クレタ人、ヒッタイト人、エジプト人などが居住する国際都市であったことが記されている（*Tubb,1998:73*）。そのウガリトにおいても、アスタルテ（イシュタル）は法と正義の女神として崇められており、最高神エル²⁶の配偶神であるアティラトゥ（旧約聖書におけるアシェラ）と時に同一視されていた（*Tubb,1998:74*）。

また、当時エジプトと密接な関係を保っていた港湾都市ビブロスにおいて、主神パアルの配偶神はバアラアトであり、この女神は牝牛の姿で表されるエジプトのハトホル女神と同一視され、「ビブロスの女主ハトホル女神²⁷」と呼ばれていた（*Elayi, 2018, p. 40-41*）。レバント全般においては、アスタルテ（イシュタル）は牛の角を頭上に戴く姿で表される（*Patai,1990,p.57*）。

つまり、星形文とイシュタル女神、そして牝牛の意匠はレバントにおいて一連の意味を持つて結びついていることが明らかとなるのである。

それではクヌムイトのメダリオンの中で未だ検討が残されている七宝文について考察する。七宝文はメソポタミアでは殆ど類例がない。また、レバントにおいての発見例は現在のところ2例で、前述のビブロスの王家の墓より出土した貝形装飾品の縁取り部分に七宝連続文が金の

有線象嵌で施されている例と、テル・エル・ブラーク (Tell el-Burak) の宮殿壁画に描かれていたエジプト風の狩猟場面に表れる七宝連続文である (Sader and Kamlah, 2010: 136-8)。いずれもエジプトと関連のある場所からの発見であり、しかも事例数が限られていることから、文様の起源はレバントではないと考える。それでは、エーゲ海方面の可能性はあるだろうか。

中王国時代の研究者グラジェツキ (Grajetzky) は、トード神殿への奉納物の銀器とクヌムイトの墓装飾品はおそらくエーゲ海地域からもたらされたものと推測している (Grajetzky, 2006:47)。確かにトード出土の銀製品には波状連続文が施されたものがあり、エーゲ海地域 (特にギリシア) の美術様式に頻繁にあらわれる文様である。ギリシア世界は波状文や渦巻き文、雷文などの幾何学文様が伝統的に土器などの装飾に使われていた。特にクヌムイトと同時代の中期ミノア期では、カマレス土器と呼ばれる大胆な幾何学文様や海洋文が器面に描かれた土器が東地中海沿岸地域に流通していた。クレタ島で生産されたカマレス土器は、クレタ島での祭祀施設で多く発見されるほか、前述のビブロスの王家の墓やウガリト、キプロス、エジプトなどでも出土している (Stewart, 1962: Kemp and Merrillees, 1980)。カマレス土器には主に円形の連続文を基礎とした文様が多く、七宝文の類例もある²⁸ことから、七宝文に関しては当時クレタ島からの影響の可能性もある。一方、同時代のギリシア本土周辺の中期ヘラディック時代に使用されていた文様には直線と円弧の組み合わせが多く、後の幾何学文様様式に直接的につながる文様である。中期ヘラディック期の土器装飾には、カマレス土器と同様に円を基本にしたものがあるが、円の中は直線文で埋められることが多く (Buck, 1944, pls.42-44)、七宝文のような円と円が重なる文様は探すことができない。

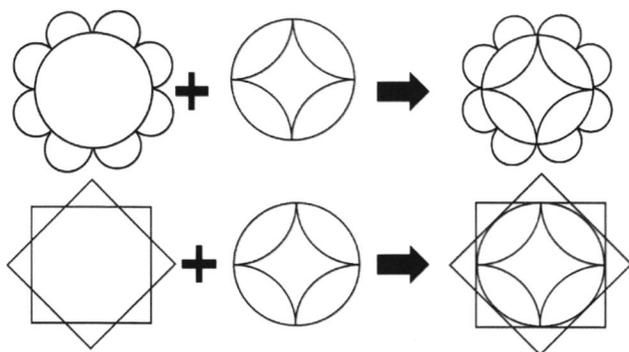


図3 クヌムイトの装飾品文様の生成過程模式図

以上をまとめ、クヌムイトのメダリオンの製作地については以下のような推察ができる。当時のレバントには花卉文や星形文は広く知られており、特に星形文はアスタルテ (イシュタル) 女神と関連がある。さらにレバントのアスタルテ女神は牛の角を持って表現されることが多く、特にビブロスにおいては牝牛の姿としてのハトホル

＝アスタルテ女神の信仰が盛んであった。さらに、幾何学文である七宝文はクレタ島に源流があるとすると、これらの意匠がすべて組み合わせてメダリオンを作ることができた場所はレバントの東地中海沿岸地域の貿易都市であると考えることができる。そこでやはり当時エジプトにとって最も重要な交易都市であったビブロスが候補として浮上する。

当時は、アッシリアの商人による一大交易ネットワークが存在しており、縦横に伸びる交易路によって小アジアやシリア、そしてレバントとエジプトとの間で活発な物資のやり取りが行

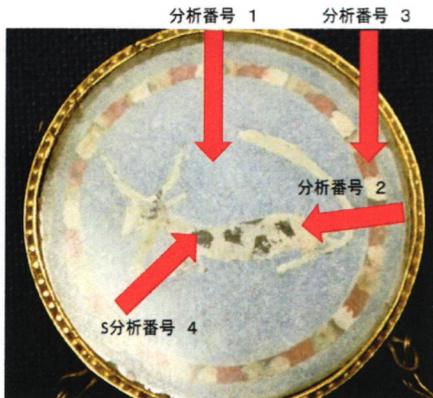


図4 分析箇所

われていたことが知られている (Moreno García, 2017: 115)。ビブ罗斯はメソポタミア及びアナトリア半島からエジプトへの交易ルート上にあり、北方からの金属塊や武器、木材、織物、などがそこに集積され、そしてエジプトへと運ばれていたことは明らかで、ビブ罗斯をエジプトが半ば植民地のように影響を与えた理由もこのためであろう。紀元前 2050 年頃以降、クレタ島の中期ミノア IA 期 (MMIA) の特徴を持つ土器がキプロスやサモス島で出土し、さらにクレタ島のものと同形状の剣や宝飾品などがギリキア (アナトリア半島南部の東地中海沿岸地域)、ウガリト、ビブ罗斯などで出土するようになる。上述のカマレス土器な

どもクレタ島とビブ罗斯との交易を示唆する。一方、この当時はクレタ島とエジプトの直接コンタクトを立証するものは殆どなく、レバントで作られたエジプト風の品がクレタ島へと運ばれているのである (Watrous, 1998, p. 21)。つまり、クレタ島からの交易品はビブ罗斯やウガリトなどのレバントの沿岸に一旦運ばれ、それから北のメソポタミアやアナトリア方面や南のエジプト方面に運ばれたと考えてよい。

中王国時代のダハシュールから発見されたクヌムイトのメダリオンは、図 3 の模式図で示したように、当時の東地中海世界で広く使われていた花卉文とクレタ島由来の七宝文、そして汎レバントの星形文 (この場合は 8 芒星) と七宝文が組み合わさることによって生まれた文様であると推測できる。そして、パート女神の頸飾りをつけた牛は、エジプトと深い結びつきのあるビブ罗斯を指示しており、同時にこの装飾品の製作地がビブ罗斯であることを示唆していると考えられる。クヌムイトのメダリオンはビブ罗斯でエジプト風に作られたものが、外交の贈物としてエジプトに運ばれたのではないだろうか。

4. メダリオンの分析結果と顕微鏡観察

4-1 メダリオン部分の分析結果 (図 4～図 7、表 3)

本稿においては、クヌムイトの墓より発見された黄金製装飾品 (CG53018: SR6009) のメダリオン部分を考察の対象とする。この金製装飾品はデ・モルガンの発見以来、カイロのエジプト博物館に収蔵されており、未だかつて詳細な調査研究の対象となることがない。今回はエジプト考古学博物館セクター長モーメン・オスマン博士 (Prof. Dr. Momen Othman, Chairman of the Museum Sector, Ministry of Antiquities)、カイロ博物館館長サバハ・アブデル・ラゼク・サディク博士 (Dr. Sabah Abdel Razek Saddik, Director of the Egyptian Museum, Cairo) の許可と協力により長く研究が手つかずであったクヌムイトの金製装飾品を実見調査及び蛍光 X 線分析による調査を行うことができた²⁹。以下ではクヌムイトのメダリオンのポータブル蛍

光 X 線分析³⁰及び顕微鏡による観察による成分分析を通して、メダリオンに使われている材質を考察してみたい。

まず、蛍光 X 線分析による分析は図 3 に示したように分析番号 1 の青色、分析番号 2 の赤色部分、分析番号 3 の白色部分、そして分析番号 4 の黒色部分について行われた。分析はイード・メルタハ博士により行われ、分析装置による結果が表 3 である。

表 3 クヌムイトのメダリオン分析結果まとめ

SR 6008 クヌムイト女王の黄金装飾品 青色メダリオン部分														
分析箇所	分析した色	Si(wt%)	Au(wt%)	Ag(wt%)	Mn(wt%)	Cu(wt%)	Fe(wt%)	Ca(wt%)	Zn(wt%)	Co(wt%)	Rb(wt%)	Nb(wt%)	Ta(wt%)	Ga(wt%)
1	青色部分	98.65		0.06				1.26		0.02			0.01	
2	白色部分	99.29		0.09				0.55		0.03				0.04
3	赤色部分	98.87		0.11	0.07			0.89		0.04			0.03	
4	黒色部分	98.97		0.08	0.06			0.89						

The analysis was conducted by Dr. Eid Mertah. Elements with Concentration % ± Error% is listed in the shaded area.

表 3 の灰色部分は測定器の誤差値内であるため、考察には含まない。そうすると、どの色部分を測定してもほぼケイ素 (Si) だけしか検出されていないことになる (平均値 98.95wt%)。これはガラスなのだろうか。

まず、ガラスの組成を考えてみたい。フォーブスによると、古代ガラスの平均的な組成はケイ素 (SiO₂) 57-72wt%³¹、カルシウム (CaO) 3-10wt%、アルカリ (NaO₂ または K₂O) 9-24wt% が主成分となっている。古代エジプトのガラスも近似しており、ケイ素 55-65wt%、カルシウム 3-10wt%、アルカリ 16-25wt% が主成分である (Forbes, 1966, p.116, Table 1)。この成分比は数多くの先行研究からも立証されており、ケイ素 6 割、カルシウム 1 割弱、アルカリ 2 割強が古代ガラスの大よその調合比と言える。しかし問題は、本資料は経年変化でくすんではいるものの、ほぼ無色透明なのである。この時代には無色透明なガラスを作る技術はまだ持ち合わせていなかった。さらに、表面の顕微鏡観察において、表面に細かなミガキの痕跡が見られた (図 5)。ガラスは冷え固まる際に張力によって滑らかな表面となる。本資料が平らな板ガラスを丸く切ったのであれば、表面にはミガキ痕はない筈である。メダリオンが 1 円玉とほぼ同じ大きさであることを考えると、このミガキ痕は現代の #1000 番以上の極細目サンドペーパーを使わなければならない細かさである。しかし、ガラスは表面を研磨すると白く濁るため、現代においても艶消し効果を出したい場合にしか使用しない。また、古代のガラスは低倍率の顕微

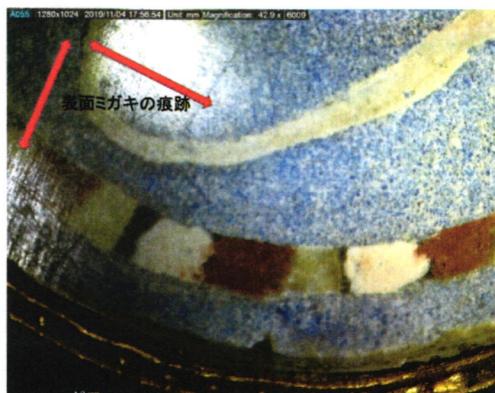


図 5 表面のミガキ痕跡

鏡を使っても気泡が見られる（図 6・④）が、図 5 には気泡がみられない。それでは、ガラスの可能性がないとすると、古代に存在したガラスに似た物質ファイアンスであろうか。ファイアンスの主成分はケイ素・カルシウム・アルカリで、これはガラスの主成分と同一である(Stone, 1956: 39)。組成成分の比率がガラスとファイアンスでは若干違い、ファイアンスはケイ素 92-99wt%、カルシウム 1-5wt%、アルカリ 0.5-3wt%である(Nicholson, 1993, p.9: 山花, 2006, p.7)。ガラスと比較するとケイ素の濃度が高い。もう一つの違いは、ガラスは物質全体が熔融してしまって結晶構造のないものであるのに対し、ファイアンスは表面部分だけがガラス化して内側(素地)の部分は熔融する前の段階で止まっている物質である(山花, 2006, pp.6-7)。図 5 で示したように、顕微鏡観察においては同倍率でもガラスよりも気泡が多く、さらに熔融していない石英(ケイ素)粒が明瞭に見られる。

ケイ素の質量比だけ見ると、クヌムイトのメダリオンの表面はガラスではなく、ファイアンスに近い。しかし、ファイアンスに不可欠なカルシウムやアルカリが検出されていないし、着色成分の銅や鉄などもまったく検出されていない。分析結果では、本資料はほぼ純粋なケイ素の塊なのである。

残る可能性は石英(水晶)を平らに磨き出して牛の図柄の上に載せていると解釈することである。石英(水晶)は 99%以上がケイ素で構成されている³²。無色透明な石英(水晶)は産地に関係なく純粋な SiO₂ である。今回の分析で使用したポータブル蛍光 X 線装置は、対象物の深さ 2 mm の部分までビームが届き、分析できるということであったが、石英の板を測定する場合は、XRF のエネルギーが低いために 1 mm の板を透過することができず、それより下にある物質の組成を検出することはできないことが判明した³³。分析実験当初は最古のガラスか、あるいはガラス質物質(ファイアンス)か、と考えていたが、実際はガラス質物質ではあっても、人工物ではない、天然の石英(水晶)を研磨して板状にしたものであることがほぼ確実となった。

しかし、まだ疑問が残る。それは、石英(水晶)板の下にある牛の図柄が何で作られているか、である。本来ならば上の石英(水晶)板を外して観察をするべきだが、文化財は非破壊が大原則である。クヌムイトのメダリオンの拡大写真は石英(水晶)板の上からの写真映像のため、あまり鮮明ではない。図 6 の②と③は同じ中王国時代のカバ像と容器片とその拡大写真である。メダリオンの青色に見える部分は、白地に青い細粒と気泡が見られる。右の類例の写真にも白い部分と青や青緑に着色されている部分があり、気泡も多い。これら 3 枚の拡大写真は色が斑に点在しており、気泡が目立つ点で共通している。一方、④の新王国時代のガラスと比較してみると、ガラスは表面に風化の傷が見えるものの、内部は非結晶質で気泡が浮かんでいることが確認できる。現状においては、①のクヌムイトのメダリオンの表面状態が最も近いのがファイアンスであることが言える。

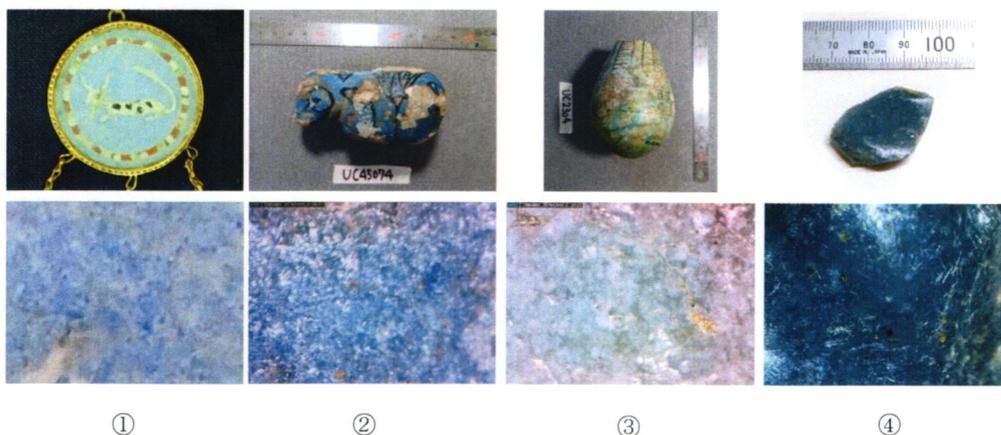


図 6 ①クヌムイトのメダリオン表面と表面の顕微鏡写真 (x50) , ②と③同時代のファイアンスの表面顕微鏡写真 (中央上下 : Petrie Museum of Egyptian Archaeology UC45074 右側上下 : Petrie Museum of Egyptian Archaeology UC2304) photographs by courtesy of the Petrie Museum of Egyptian Archaeology ④新王国時代ガラスの表面顕微鏡写真 (東海大学文明研究所蔵 SK89-20) (x50) (写真はすべて筆者撮影)

また、図7で示したように、メダリオンの写真に見られる色の滲み方と、ファイアンスの着色部分の色の滲み方が酷似している。ファイアンス製品は、粉状の原材料に水分を含ませ、練り粉状にしたものを乾燥して焼成する。ファイアンス作りは基本的に1回しか焼成を行わないため、背景色と上層が焼成の際に混じりあってしまうのである。図7右は筆者が作成した青地ファイアンス碗にマンガン線画を施した部分の顕微鏡写真である。色のにじみ方が本資料と類似していることがわかる。一方、地に色ガラス粉が熔着した場合は、色ガラスの部分だけが盛り上がるため、滲んで混ざり合うことは殆どない。

4-2 メダリオンの構造についての試案 (図8)

以上の考察をまとめると、クヌムイトのメダリオンは以下のような構造であることが推察される。

まず、黄金の外枠の高さ (図8) は 1.80 mm であるのに対し、メダリオン中央部分の計測値は 2.40 mm であった。つまり、メダリオンは外枠よりも 0.60 mm 盛り上がっていることになる。非破壊では、黄金板の厚みがわからないが、仮にこのメダリオンに使われた金の板の厚みが前述の星形文と七宝文を組み合わせた粒金細工の厚みと同じ 0.50 mm だとすると、残りのファイアンスと石英 (水晶) の厚みは合計 1.90 mm であることになる。ファイアンスの層と石英 (水晶) の層が均等な厚さだとすると、1枚が 0.80 mm でなければならないことになる。このように薄いファイアンスと石英 (水晶) の板を作ることは可能だったのだろうか。石英 (水

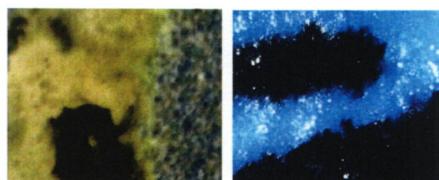


図7 色の滲み方の比較 (左:クヌムイトのメダリオン部分、右:復元ファイアンス彩色部分) (x50)

晶)はもとより硬い石であるため、不純物や節理のない質の高い石を慎重に研磨することで薄膜を作ることはできる。ファイアンスにおいても、筆者は自らの復元実験において薄さ 0.48 mm のファイアンス製薄片を作ることに成功している。いずれの製作にも熟練の工芸技術を持ったものならば不可能ではないと思われる。

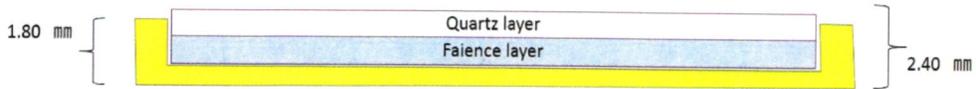


図8 メダリオンの構造試案(断面)

5. 結 び

中王国時代第 12 王朝のクヌムイトの墓より発見された黄金製装飾品の中かから、今回はガラス質のメダリオンに焦点を当てた。中王国時代の外交あるいは交易は、後の時代ほど文字記録や図像記録がないため、一見外部との交流が少ないと見なされがちだが、遺物の出土状況などからはこの時代にも文化間の活発な交流があったことが認識できた。

また、クヌムイトの黄金製装飾品は多くが当時のエジプトには存在していなかった工芸技術及び意匠を持っており、当時の外交及び交易によって東地中海沿岸地域よりもたらされたことが推測できた。さらに、メダリオンの意匠には、当時すでに汎レバントでイシュタル女神の象徴と認識されていた 8 芒星の文様や、クレタ島の中期ミノア期に存在していた円形の幾何学文(七宝文)が表わされている。しかし、牛の意匠や多色帯にはエジプト風の美術様式が使われていることがわかる。つまり、これらの意匠はエジプトの美術表現を熟知した非エジプト人の職人によって作られたことを示唆しているのである。このようなエジプト風の文物が作られる可能性の最も高い場所が当時のエジプトと非常に密接な関係を持っていたピブロスなのである。

さらに、メダリオンの理化学的分析からは、人工のガラスではなく天然の石英(水晶)であることがほぼ確実となった。残念なのは、石英(水晶)板の下にある物質が何であるか、理化学的分析では確認できなかったことである。顕微鏡写真を比較しながら検討した結果、最も近い材質としてファイアンスの可能性を提示した。現状ではここまでの考察が限界であるように思うが、本稿では考古美術的な図像比較と理化学分析を合わせた結果、遺物に手を触れることなく行う非破壊分析でも比較的詳細な考察を行うことができたと言える。

今後は研究対象を本資料と共伴して出土した他の装飾品にも広げ、中王国時代のエジプトと関わった東地中海沿岸地域の影響をより詳細に検討することを考えている。

引用文献

小林登志子 2019 『古代オリエントの神々』中公新書

山花京子 2006 『古代エジプトのファイアンス研究』, 東海大学文学部博士号請求論文(未刊行)

山花京子 2020「第8章 古代エジプトの社会をつなぐビーズ」, 池谷編『ビーズでたどるホモ・サピエンス史』, 国立民族学博物館, 昭和堂 127-142 頁

Ahren, A., 2011, "A "Hyksos Connection" ? Thoughts on the Date of Dispatch of Some of the Middle Kingdom Objects Found in the Northern Levant," Mynářová, J., ed., *Egypt and the Near East—the Crossroads*, Charles University in Prague, Czech Institute of Egyptology.

Aldred, C., 1971, *Jewels of the Pharaohs*, Thames and Hudson.

Allen, J., 2008, "The Historical Inscription of Khnumhotep at Dahshur: Preliminary Report." *Bulletin of the American School of Oriental Research*, pp. 29-39.

Altenmüller, H., and Moussa, A.M., 1991, *Die Inschrift Amenemhets II. Aus dem Ptah-Tempel von Memphis. Ein Vorbericht*, 18, pp. 1-48, Studien zur Altägyptischen Kultur, Hamburg.

Aruz, J., et. al. eds., 2008 *Beyond Babylon: Art, Trade, and Diplomacy in the Second Millennium B.C.*, The Metropolitan Museum of Art, New York.

Braidwood, R.I., and Braidwood, L., 1960, *Excavations in the Plain of Antioch I: The Earlier Assemblages Phases A–J*, Oriental Institute Publication, vol. 61, Chicago.

Buck R.J., 1941, *Middle Helladic Mattpainted pottery*, The Swedish Excavations at Asea in Arcadia, Lund.

Cline, E., and Harris-Cline, D. (eds.), 1998, *The Aegean and the Orient in the Second Millennium*, Aegaeum 18, University of Liège, Liège.

Durand, J-M., 1999, "La façade occidentale du Proche-Orient d'après les textes de Mari." Caubet, A., ed., *L'acrobate au taureau: Les découvertes de ell el-Dab'a et l'archéologie de la Méditerranée orientale*, pp. 149-164, Musée du Louvre, Paris.

de Fidanza, M.V.P., 1998, "The *Tmp3w* People in the Amenemhet II's Annals, Göttinger Miszellen, 167, pp. 89-94.

de Morgan, J., 1903, *Fouilles a Dahchour en 1894-1895*, Vienne.

de Morgan, J., 1895, *Fouilles a Dahchour, Mars-Juin 1894*, Vienne.

Edel, E., 2008, *Die Felsgräbernekropole der Qubbet el-Hawa bei Assuan, I: Abteilung, Band 2*, Ferdinand Schöningh, Paderborn.

Elayi, J., 2018, *The History of Phoenicia*, Lockwood Press,

Farag, S., 1980, "Une inscription Memphite de la XIIe Dynastie," *Revue d'égyptologie* 32, pp. 75-82. Paris.

Forbes, R. J., 1966, *Studies in Ancient Technology*, Vol. V, Leiden, Brill.

Girella, L., 2010, "Depositi ceramici del MM III da Festòs e Haghia Triada." *Studi di Archeologia Cretese VIII*, Padova.

Grajetzki, W., 2006, *The Middle Kingdom of Ancient Egypt*, Duckworth Egyptology. Gerald Duckworth & Co. Ltd.

Goedicke, H., 1984, "Abi-Sha(i)'s Representation in Beni Hasan," *Journal of the American Research Center in Egypt*, 21, pp. 203-10.

- Hayes, W., 1971, "The Middle Kingdom in Egypt," in *The Cambridge Ancient History*, vol. I, part 2, Edwards, I.E.S., Gadd, C.J., Hammound, N.G.L., eds., *Early History of the Middle East*, pp. 464-531, Cambridge.
- Helck, W., 1954, *Untersuchungen zu den Beamtentiteln des ägyptischen Alten Reiches*, ÄF 18, Glückstadt.
- Hollis, S.T., 2009, "Hathor and Isis in Byblos in the Second and First Millennia BCE", *Journal of Ancient Egyptian Interconnections*, vol. 1:2, pp. 1-8.
- Kamrin, J., 2013, "The Procession of "Asiatics" at Beni Hasan," Aruz, J., Graff, S.B., and Rakic, Y., (eds.), *Cultures in Contact – From Mesopotamia to the Mediterranean in the Second Millennium B.C.*, The Metropolitan Museum of Art, New York, pp. 156-169.
- Kemp, B., and Merrillees, R.S. 1980, Barry Kemp/Robert S. Merrillees, *Minoan Pottery in Second Millennium Egypt*, Mainz am Rhein.
- Kempinski, A., "The Middle Bronze Age," Ben-Tor, A., ed., *The Archaeology of Ancient Israel*, 1992, Yale University Press.
- Klebs, L., 1922, *Die Reliefs und Materieen des mittleren Reiches (VII. – XVII. Dynastie, ca. 2475-1580, v. Chr.)*. Material zur ägyptischen Kulturgeschichte. Heidelberg.
- Kopetzky, K., 2012, "Egyptian burial Customs in the Royals Tombs I-III of Byblos," Afeich A.M., ed., *Cult and Ritual on the Levantine Coast and its impact on the Eastern Mediterranean Realm*, Bulletin d'archéologie et d'architecture libanaises ·Hors Série 10, pp. 393-412.
- Malek, J., and Quirke, S., 1992, "Memphis, 1991: Epigraphy," *Journal of Egyptian Archaeology*, 78, pp. 13-18.
- Moreno García, J.C., 2017, "Trade and Power in Ancient Egypt: Middle Egypt in the Late Third/Early Second millennium BC," *Journal of Archaeological Research*, vol. 25, No. 2, pp. 87-132.
- Montet, P., *Byblos et l'Égypte, Quatre Campagnes de Fouilles 1021-1924*, BAH 11, Paris.
- Lilyquist, C., 1993, "Granulation and Glass," Bulletin of the American School of Oriental Research, No. 290/291, May-Aug. pp.29-94
- Mars, E. S., 2007, "Amenemhat II and the Sea: Maritime Aspects of the Mit Rahina (Memphis) Inscription," Bietak, M., (ed.), *Ägypten und Levante/ Egypt and the Levant*, XVII, Österreichische Akademie der Wissenschaften, Wien.
- Maxwell-Hyslop, 1971, *Western Asiatic Jewellery, c. 3000-612 B.C.*, London.
- Moran, W., 1987, *The Amarna Letters*, reprinted in 1992, Johns Hopkins University Press.
- Newberry, P.E., 1893, *Beni Hasan I*, Archaeological Survey of Egypt, London
- Nibbi, A., 1987, *Ancient Egyptian Pot Bellows and the Oxhide Ingot Shape*, Oxford.
- Patai, R., 1990, *the Hebrew Goddess*, Waystate University Press. 3rd edition.
- Posner, G., "A New Royal Inscription of the XIIth Dynasty," *Journal of the Society for the Study of Egyptian Antiquities* 12, pp. 7-8. Toronto.
- Rashed, M.G., "Goddess Bat and the confusion with Hathor" in B.S. El Sharkawy (ed.), *The Horizon*,

- studies in Egyptology in Honour of M. A. Nur El-Din*, Cairo, 2009, 407-419ff., 6 pls.
- Rainey, A.F., 2006, "Sinuhe's world, 277-299," Mainer, A.M., and de Miroschedji, P. (eds.), *"I Will Speak the Riddle of Ancient Times": Archaeological and historical Studies in Honor of Amihai Mazar on the Occasion of His Sixtieth Birthday*, Winona Lake.
- Ryholt, K.R.S., 1997, *The Political Situation in Egypt during the Second Intermediate Period, C. 1800- 1500 B.C.* Copenhagen
- Sader, H., and Kamlah, J., 2010, "Tell el Burak: A new Middle Bronze Age site from Lebanon," *Near Eastern Archaeology*, vol. 73, pp. 130-141.
- Saretta, P., 1997, *Egyptian Perception of West Semites in Art and Literature during the middle Kingdom. An Archaeological, Art Historical, and Textual survey*, Ph.D. dissertation New York University, UMI, Ann Arbor, 1999.
- Shea, W.H., 1981, "Asiatic Balance among the Beni Hasan Asiatics," *Biblical Archaeologist*, 44, no. 4 (Autumn 1981), pp. 219-28.
- Staatliche Museen zu Berlin, 1992, *Das Vorderasiatische Museum, Berlin*, Phillip von Zabern, Mainz am Rhein.
- Starr, R., 1939, *Nuzi: The Report of the Excavations at Yorgan Tapa near Kirkuk, Iraq, 1927-1931*, by Harvard University in conjunction with the American Schools of Oriental Research and the University Museum of Philadelphia.
- Stewart, J.R., 1963, *The Tomb of the Seafarer at Karmi in Cyprus*, Opuscula Atheniensia IV.
- Tubb, J.N., 1998, *Canaanites*, University of Oklahoma Press.
- Watrous, L.V., 1998, "Egypt and Crete in the Early Middle Bronze Age: A case of trade and cultural diffusion," in Cline, E., and Harris-Cline, eds., *The Aegean and the Orient in the Second Millennium: Proceedings of the 50th Anniversary Symposium, Cincinnati, 18-20, April 1997*, Aegaeum 18, Liège and Austin. pp. 19-28.
- Wilson, A., 1950, "Egyptian Historical Texts," in Pritchard, J., ed., *Ancient Near Eastern Texts Relating to the Old Testament*, pp. 227-64, Princeton.
- Willems, H., 2014, *Historical and Archaeological Aspects of Egyptian Funerary Culture: Religious Ideas and Ritual Practice in Middle Kingdom Elite Cemeteries*, Culture and History of the Ancient Near East 73, Brill, Leiden.
- Wimmer, S.J., 2005, "Byblos vs. Ugarit: The Alalakh Seal Impression 194 Once Again," *Levant* 37, 127-132.

¹ This article is a part of a research collaboration between Prof. Dr. Momen Othman of Ministry of Antiquities, Arab Republic of Egypt, and Dr. Eid Mertah, the Egyptian Museum, Cairo, Prof. Yasunori Matsuda of Toyo Institute of Arts, and Yasuyuki Miyazawa of Tokai University.

² The ornament that the author is focusing on this article is not suitable to wear on a neck, because it does not make a loop. Instead, it looks like a part of a head ornament with

a blue vitreous material in a center, chained with two gold rosettes and three gold star-shaped parts. Nevertheless, the author shall call the blue circular ornament as a medallion, for want of a better name.

³ 本調査は 2019 年度学部等教育研究補助金「学内文化財コレクションを基軸とした文理融合研究—古代の製作技術解明に向けて—(院)」の補助を受けたものである。また、カイロ エジプト博物館にての調査許可及び写真撮影許可は 2019 年 11 月 3 日に館長サバハ・アブデル・ラズイク・サディク博士より与えられた。Permission of research on SR 6009 and photograph were granted by the Director of the Egyptian Museum, Cairo, Dr. Sabah Abdel Razek Saddik on Nov. 3, 2019.

⁴ Catalogue generale 番号 CG53018 である。

⁵ 中王国時代の編年は後の新王国時代と比較して研究者による共通のコンセンサスが乏しい時代だが、アメンエムハト 2 世の治世は紀元前 1877/1876~1843/1942 とされている (Grajetzki, 2006:45)。

⁶ リリクイスト (Lilyquist) は、クヌムイトの黄金製品は墓の礼拝室より見つかったもので、アメンエムハト 2 世の銘がないため、これらの遺物をクヌムイトと同時代と結論づけることに疑問を呈しており (Lilyquist, 2015: 36ff)、次の王であるアメンエムハト 3 世時代に類例があることから、これらの遺物はクヌムイトの死後暫く経過してから墓前に捧げられたものであろうと推察している (Lilyquist, 1993: 37f)。

⁷ de Morgan, Jaques ed., *Fouilles a Dahchour: 1894 - 1895*, Wien 1903

⁸ 61 項目とは、デ・モルガンが発掘し取り上げた装飾品はすでに繋ぎ紐が劣化のため切れていたため、装飾品のパーツ毎に番号を付与して登録しているものもあれば、大量のビーズは連としてまとめて登録しているものもあるためである (de Morgan, 1903: 58-65)。

⁹ デ・モルガンはクヌムイトの黄金製品をフェニキアやエトルリアの金工芸と比較している (de Morgan, 1903: 65-66) が、時代的にはフェニキアやエトルリアよりも本対象遺物の方が古い。

¹⁰ レバントとは、現在の南シリア、レバノン、ヨルダン、イスラエル、パレスチナ一帯の地域を指す。

¹¹ 現在のベイルートの北 45 km に位置する港湾都市で、エジプト語では *kpn* または *kbn* と表記された。

¹² 編年は Aruz, J., et. al. eds., 2008, p. xvi-xvii を参考とした。

¹³ 「メンフィス碑」は 1980 年になって初めてその存在が知られた (Farak, 1980: Posner, 1982)。

¹⁴ 外部地域からエジプトにもたらされたものは、国家的な交易によるものであるのか、それとも王の命じた献上品であるのか定かではない。マーカスはおそらく王主導の商業的交易であったと考えている (Marcus, 2007: 170) が、本稿ではより中立的表現として「搬入品」という言葉を使用する。

¹⁵ アムウという固有名詞は、エジプト人たちが東からやってきたセム系の言語を話す異民族の総称であったと考えられている (Kamrin, 2003: 161)。

¹⁶ 族長の名がセム語起源であることは、多くの研究者の見解である。ゲーディケは、「アビシヤ (イ)」は旧約聖書 (I. 2:16) に登場するヨアブとアサヘル兄弟の名と一致するとしている (Goedicke, 1984: 203)。サレッタは「アビシヤイ」を「私の父は高貴な者」と解釈している (Saretta, 1997 111, n.280)。

¹⁷ カムリンの主張する「革製のふいご」については、賛同しかねる点がある。クヌムヘテプ 2 世の墓壁画に描かれている「ふいご」らしきものは、左右対称形で描かれており、「ふいご」であれば片側に 1 つの送風口があるはずだが、壁画には見当たらない。さらに、もしこれがカムリンの主張するように手動式もしくは足踏み式の「革製ふいご」であった場合、その形状が後の時代に伝えられていないのは不思議である。後の新王国時代の墓壁画に描かれるふいごは「壺形ふいご (pot bellow)」であり、蛇腹の手動式あるいは足踏み式ふいごは出土例も壁画に描かれている例もないのである。

¹⁸ Catalogue No. 53070, 高さ 4.6 cm で紅玉髓、ラピスラズリとトルコ石で象嵌されている (Aldred, 1971: 196)。

¹⁹ Direction Générale des Antiquités, Beirut, Lebanon, 16235, Byblos Royal Necropolis II, Middle Bronze Age, 高さ 7.5 cm

²⁰ ただし、デ・モルガンはこの護符をハトホルである、としている (de Morgan, 1903: 64)。

²¹ メダリオン de Morgan, 1895, Pl. XV, 3; メダリオン Munich, Staatliche Sammlung Ägyptische Kunst ÄS 5301; Windsor, 胸飾り Eton College 215 P 17

²² Egyptian Museum, Cairo, No. 53824-5, ライズナー(Reisner)による 1903 年のナーガ・エル・デールの発掘において発見された。

²³ しかし、これは頸飾りのように輪にはならない。したがって、メダリオンという呼称は適切ではないかもしれないが、このような装飾品は類例がないため、現状ではメダリオンと表記しておく。

²⁴ イシュタル女神はサルゴン王時代にシュメールのイナンナ女神 (天空の神アンの娘、太陽の神ウトウの妹である金星の女神) と同一視されるようになり、天空、戦闘、正義などを司る女神として広く信仰を集め、ニップール、ラガシュ、ザバラマ、ウル、ウルクなどに神殿が建立された。

²⁵ Kempinski, 1992, Fig. 6.4.1

²⁶ ウガリトにおいて信仰を集めていたのは最高神エル (セム語で「神」の意) である。エルの配偶神は海の女神であり、生き物と神々を創造したアシェラである。また、ウガリトにおいて信仰されていた神々は系統立った記録が残されている。それによると、バアル神は王権と神権を司り、「王子」や「主」と表現され、「雲に乗るもの」として嵐の神ハダドと習合し、バアル・ハダド神として雨と豊饒 (豊穡) をもたらす。バアルの配偶神は戦闘と愛の女神であるアナトである。太陽の女神はシュメシュ女神、月を司るヤリフ神、「疫病の神レシェフ」、「海の王子」、「川の主」であるヤム神、冥界の神モト、穀物の神ダガンなどが挙げられる (Tubb, 1998: 74)。

²⁷ ビブロスとエジプトの女神ハトホルとの結びつきは古王国時代第 6 王朝から知られている (Hollis, 2009, p.1)。

²⁸ クレタ島ファイストスのハギア・トリアダ出土 Mt. XXIV.8, Mt. XXIV.9, Mt. XXIV.9 (同じ番号で 2 文様記録されている) (Girella, 2010)。

²⁹ 本稿はカイロ博物館に提出した研究計画 A Research Proposal toward Understanding History of Brazing/Soldering in Ancient Egypt (2019 年 8 月 12 日提出) の一環として行ったクヌムイトの金製装飾品 (CG53018) の調査のうち、ガラス質のメダリオン部分のみについて考察を行った。粒金や黄金製品についての考察は別稿で取り扱う。また、蛍光 X 線分析については、カイロ エジプト博物館の保存修復部門所属のイード・メルタハ博士の協力により実現した。

³⁰ 蛍光 X 線分析装置はイタリアのエリオ社 (Elio Spectrometer, XGlab srl, Milan, Italy) の EDXRF 分光分析装置である。セッティングは以下の通りである。The instrument can detect elements from Na to U, with a field of analysis extending between 1 and 50 keV. X-ray radiation is generated using an Rh tube, with an electron accelerating voltage from 10 to 50 kV and a filament current from 5 μ A to 200 μ A. (<http://www.xglib.it/compact-portable-xrf-spectrometer-elio.shtml>)

³¹ wt%(weight percent)は質量百分率のことである。ただし、上記では微量成分の記載を省略しているため、足し合わせても 100%にはならない。

³² 石英 (水晶) の分析値は以下を参照されたい。

https://www.researchgate.net/publication/282158335_Marwit_Rod_El_Leqah_Quartz_Deposits_as_a_Strategic_Source_of_High_Purity_Quartz/figures?lo=1

³³ 石英に対する X 線の透過については、東京電気大学工学研究科物質工学専攻 阿部善也博士に以下の助言をいただいた。「XRF において Si の K 線 (1.7 keV) はきわめてエネルギー

が低いので、物質中をほとんど透過しません。Si と原子番号に近い Al 金属の中で Si-K 線の半減層（強度が半減する厚さ）は 9 μm 、もっと密度の低い C の中でも 70 μm です。つまり、1 mm 近くある石英板ですと、検出される Si のピークに、石英板の下にある物質からの情報は一切含まれません。」（2020 年 4 月 16 日）